

ルンティンガー家の企業経営

松 田 緝

1

„Item 3c6 glb z5 st259 3m .90.319.325. g57d238, .200. g57d238 723bt38g, .95. g57d238 s47t f59 .2. sp32zz 58d 1388 sc65cz28 58d .21. g57d238 w2913t29 d2s pf38cztlg nach sl8d ml9g92t28tlg.“ これはレーゲンスブルク Regensburg の商人マテウス・ルンティンガー Matthäus Runtinger が 1390 年に帳簿に記載した記録である¹⁾。この暗号文めいた記録を解読する鍵は、1 から 5 までのアラビア数字を母音に、6 から 9 までを使用頻度の高い子音に置き換えることにある。すなわち 1 = a, 2 = e, 3 = i, 4 = o, 5 = u, 6 = h, 7 = l, 8 = n, 9 = r とすると次の文章となる。„Item ich gab zu steur im 90 jar 325 guldein, 200 guldein Leibting, 95 guldein solt für 2 spiezz und ainnschüenzen und 21 guldein weraiter des pfincztag nach sand margretentag.“ アラビア数字を数字として用いる場合には前後にピリオドを打って区別している。内容はこの年の市に対する納税申告に関するものであり、アラビア数字の読めぬ税務署の役人に対する措置であったものと推測されるが、こういう帳簿を残しているルンティンガーの企業は、一体どのようなものであったろうか。時代はフガー家 die Fugger やウェルザー家 die Welser で知られる「フガー家の時代」„die Zeitalter der Fugger“ よりも更に遡る時期であり、本拠地はアウクスブルク Augsburg やニュルンベルク Nürnberg でなくレーゲンスブルクであるから、中世末期のドイツ商業資本の華々しい展開に関心を抱く者にとっては、興味のそそられるテーマである。ところでこのルンティンガー家の商業帳簿の存在は 1893 年フランツ・エーブナー Franz Ebner に

よって報告され、フランツ・バスティアン Franz Bastian がバイエルン科学アカデミー歴史委員会 die Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften の依頼でその整理を引き受け „*Das Runtingerbuch 1383–1407 und verwandtes Material zum Regensburger–Südost-deutschen Handel und Münzwesen*,“ 3Bde, 1935–44. として刊行された²⁾。

1) Balduin Penndorf, *Geschichte der Buchhaltung in Deutschland*, 1913, S.38–39.

但し若干の個所は解説の便のため修正してある。

2) 本書は *Deutsche Handelsakten des Mittelalters und der Neuzeit*, hrsg. v. der Historischen Kommission bei der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, Bd. VI–VIII として出版された。

レーゲンスブルクの市文庫の中に納められていた „*chaufmanschaft und wegselpuch*“ という表題をつけた 558 頁のフォリオ版に 1383 年から 1407 年までの営業記録をドイツ語で記した 416 頁の本文を持つこの資料は、バスティアンによって先ず商業帳簿の本文が 1935 年に „*Text des Runtingerbuchs*“ と題する第 2 巻として刊行され、次いで第 3 巻としてルンティンガー家のさまざまな文書が 1943 年に „*Urkunden zur Runtingergeschichte, zur Munz- und Handelsgeschichte*“ と題して出され、翌 1944 年に第 1 巻 „*Darstellung*“ が総まとめの叙述として発表された。ところが彼のルンティンガー帳簿から出発したこの 800 頁を越える論述は、大部分がルンティンガー以外の南ドイツの他の資料に依拠するものであったため、肝腎のルンティンガー家の企業経営の実態は見失われてしまった。そこでルンティンガー家の商業帳簿及び個々の文書に基づいて、この時代のレーゲンスブルクの商業活動、経済生活及び法状態を概観する労作がアイケンベルク Wiltrud Eikenberg 女史の 1976 年のモノグラフィー „*Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*“ として発表された³⁾。本稿はこれに基づいてルンティンガー家の企業の

概要を覗うことによって、中世後期の上ドイツ商業資本の性格と役割を確認する作業の一端としたいと念願するものである。

3) 本書は次の副題を有する. „*Ein Spiegel süddeutscher Rechts-, Handels- und Wirtschaftslebens im ausgehenden 14. Jahrhundert.*“

2

ルンティンガー家は古くは Roumptinger と称した上プファルツ Oberpfalz の騎士の一族であるらしく、同族は低バイエルン Niederbayern の各地で立証されるが、レーゲンスブルク市民として現われるのは、アルブレヒト Albrecht 及びヴィルヘルム Wilhelm という兄弟が市の記録に、アルブレヒトは 1347 年、ヴィルヘルムは 1349 年に市民として記されているのが最初である。アルブレヒトは 1357 年のその遺言状から、富裕なぶどう酒商であったことがわかる。ヴィルヘルムに関しては 1350 年 4 月に „Wilhelm Runtinger, Bürger zu Regensburg“ がオーベルミュンスター Obermünster で果樹園を購入した記録があり、また 1352 年にはレーゲンスブルクの隣り村のデッヒベッテン Dechbetten の Vogtei- und Richteramt の役職にある者としてザンクト・エンメラム修道院 Kloster St. Emmeram の土地台帳に見られる¹⁾。このヴィルヘルムがルンティンガー家の企業の創始者である。

1) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 20–24.

「したがって次の推定は尤もと思われる、アルブレヒト及びヴィルヘルム兄弟は、初めて文書に記されたより少し以前に、すでに裕福な者として市に移住して来たのであり、彼らはそこにおいて——時も所も共に良しと思われたので——すでに持っている財産を商売で増やすと共に、儲かる役職を希望した」とアイケンベルクは説明する²⁾。ヴィルヘルムの妻はレーゲンスブルク

の古い都市貴族レーベル家 die Löbel の出で、前記の果樹園及び役職ももとは同家のものであった。1357 年からはヴィルヘルムは 45 人の市参事会員の仲間入りをすると共に陪席判事 Besitzer にもなっている。こうしてレーゲンスブルク市に確乎とした地歩を占めたヴィルヘルムの企業活動の基盤を知るためには、先ず当時のレーゲンスブルク市の実態を概観する必要がある。

2) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 23.

ルンティンガー兄弟がレーゲンスブルクの商業活動と政治生活に係わりを有した頃は、市は南ドイツ最大の商業都市としてその繁栄の絶頂にあった。市の人口は 14 世紀において 1 万 2 千から 2 万の間を上下したものと推定される。しかしこの強大な商業都市も自由独立の自治都市としての地位を獲得するには 2 世紀に亘る長い闘争の過程を経過せねばならなかった。レーゲンスブルクは皇帝フリードリヒ 1 世 Friedrich I. の治世 1161-85 年の間に帝国都市となっていたが、市の実権はレーゲンスブルク司教とバイエルン公との争いの的となっていた³⁾。両者の争いの間にあって市を実際に独立の立場に導くのに必要な官職は、市民層が不屈の努力によって勝ち取るべき対象とされねばならなかった。最初に獲得されたのは 1207 年 3 月 9 日の国王フィリップ Philipp の特許状による、商業監督官 Hansgraf を市民の間から選出する権限である。もともとハンスグラーフは国王の役人で、隊商を護送するのをその任務とした (hans=Geleit) が⁴⁾、この時代のレーゲンスブルクにとってハンザ Hanse とは全商人の団体を意味し、その指導者であるハンスグラーフは商業活動全体を監督する権限を有し、司教や公の干渉を受けずにこれを市民の間から選出することは商業都市レーゲンスブルクのその後の発展にとって重要な意義を有することであった⁵⁾。

- 3) 「市民層の向上は、2人またはそれ以上の都市領主がいて張り合った処では、特に有利な前提の下に行なわれた。市民は両者の間をうまく立ち廻って絶えず地歩を占めることができた。レーゲンスブルクでは皇帝は一種の上級都市領主に留まり、彼の代理を可成り自律的に務めたのは、上級裁判所長及び都市領主としての皇帝の城代で、13世紀初頭以来ヴィッテルスバッハ家の領邦君主であった。都市支配における本来の競争相手は司教であった。」 Karl Bosl, *Gesellschaftsentwicklung 900—1350 in Handbuch der deutschen Wirtschafts- und Sozialgeschichte*, Bd. 1, 1971, S. 247.
- 4) K. Bosl, *a. a. O.*, S. 244.
- 5) K. Bosl, *a. a. O.*, S. 246 ; W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 37.

続いて 1230 年以來、市の軍事高権 Wehrhoheit が取得され、1244 年には市民の間から出た市長 Bürgermeister の任命が立証され、この趨勢は 13 世紀 50 年代の諸文書において証明される参事会制度の確立を齎らした。それは毎年新たに選ばれる 16 名の都市貴族から成り、後には内部参事会 innerer Rat と呼ばれて各参事会員がそれぞれ特殊な行政部門を担当した。これに対し市民生活の利害に重要な関係を有する特別な事件を審議するための外部参事会 äußerer Rat が 1295 年の文書に初めて見られるが、これは同じく都市貴族から選ばれた 32 名の参事会員より成った。この数は次の世紀のアウエル騒動 Auer-Aufstand の後、13 の各ツunft から選出された各 1 名の組合親方 13 名を加えて 45 名となった⁶⁾。ヴィルヘルム・ルンティンガーの加わった 45 人参事会 fünfundvierziger Rat がこれである⁷⁾。

- 6) アウエル家の市政奪取とその専制の崩壊について記したバルトールトは、13 の各ツunft から 4 名ずつを出した 52 人より成る Vierer と呼ばれる制度があったことを報告している。Friedrich Wilhelm Barthold, *Geschichte der deutschen Städte und des deutschen Bürgertums*, 2. Ausgabe, 1859, Viertel Theil, S. 26—29.
- 7) 上述, 92 頁.

司法権についてもレーゲンスブルク市民は公と司教の財政難を利用して、いろいろな裁判権の取得に努めた。1360年には下級裁判権を有するシュルトハイス官職 Schultheißenamt を抵当として取得し、修道院長裁判権 Propstgericht も 14 世紀中に取得乃至は無力化することができた。こうして 1394 年からはこの 2 つの法廷は一つの法廷に統合されてシュルトハイス裁判所として機能し、裁判長であるシュルトハイスは参事会によって一般に 2 年任期で選ばれた。更にこれらの下級裁判所の判決に対する上訴審としての市裁判所 Ratgericht が形成されるが、特定の名称は有せず単に „der Rat“ とか „meine Herren vom Rat haben entschieden“ というように表現された。これは商事裁判所 Hansgericht の判決の第 2 審としても必要であり、また特に刑事裁判では第 1 審的活動も行なった。その法廷は市役所内にあって、判決は参事会によって、すなわち一般には多分その委員会により、また特別な場合には全員によって下された。すでに市民層は不移管の特権 Privileg de non evocando を 1230 年に得ていたが、1351 年には不上訴特権 Privileg de non appellando を得て、市は外部の裁判権から完全に独立することができた⁸⁾。

8) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 38–39.

独立の立法権の発展は 1245 年のフリードリヒ 2 世 Friedrich II の特許状で開始され、参事会と市民層の直属性 Unmittelbarkeit と帝国自由 Reichsfreiheit がその中で認められた。こうして立法権 ius statuta condendi を与えられた帝国都市参事会が市民層の了解の下に独自の法規定を作成する権限が与えられた⁹⁾。以上見てきたレーゲンスブルクの行政、司法、立法に関する都市法制の発展から、ルンティンガー一家が企業活動を営んだ頃のレーゲンスブルクは、皇帝に直属する帝国自由の都市であり、長い間の闘争を通して独立を勝ち得た市民層が彼ら自身の確乎たる法規によって統一されている強力な商業都市であったと云うことができよう。このような都市においてルンティ

ンガー家が占めた多くの役職を見てみることによって、当時の企業活動の舞台が更に明瞭となるであろう。

9) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 39–40.

1388年にヴィルヘルム・ルンティンガーは内部及び外部参事会からフラーガー Frager の職に選出された。当時レーゲンスブルク市は都市同盟に加入したため上バイエルン諸公の包囲を受けていたので、強大な権限を与えられた強力な指導者を必要としていた。市参事会全体の長は市長であり、市長の代理を勤める首席参事会員は会計官 Kämmerer と呼ばれた。会計官の仕事は市収入の管理、市長不在の際の代表及び内部参事会の常任議長であり、更に私的な紛争の調停と軽犯罪を処理するため市役所で定刻に開かれる日常裁判権 Tagesgerichtsbarkeit も有した。この最後のものは参事会議長という権限に基づくもので、参事会は全員で上述の市裁判所を構成し¹⁰⁾、軽い事件の場合は会計官を単独裁判官として委任できた。この会計官の職を含み且つこれに代るものとして、非常事態に対応するために上述のフラーガーという職が1388年に新たに設けられたのである。ヴィルヘルムはこの職に就くことによってレーゲンスブルク市民として最高の栄誉に達した。というのは1334年アウエル一族を追放した市参事会は、向う10年間は市長を市民からは選ばぬことを決議したため¹¹⁾、最初は警察的機能を有していた市長職もその後は対外事件での代表者に過ぎぬものとなり、実権は会計官が握ることになったからである。

10) 上述, 94 頁。

11) F. W. Barthold, *Geschichte der deutschen Städte und des deutschen Bürgertums*, 2. Ausgabe, 1859, Viertel Theil, S. 27, W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 43.

ヴィルヘルムは長年の参事会員在任中、市の税務主任 Steuerherr, 取引税役 Ungelter, 橋監督 Brückenmeister として活動したので、これらの職務についても一瞥しておかねばならない。税務主任は参事会の常設委員会に属して、収税吏による税金徴収の監督、租税台帳の作成、納入金の管理が委ねられ、毎年参事会に会計報告を行なった。特に税務主任によって監督された税は、年々の直接税 Schatzsteuer で、これは不動産、相続財産及び現金財産に対して課され、税率は当時3%であった。これは後述するルンティンガー帳簿からもわかるように、宣誓に基づく納税者の自己申告によって課税された。この他に税務主任は所謂 Losung も扱ったが、これは動産、主に家具、食料及び装飾品を課税対象とした。しかし1395年の参事会決議によってこれは、再販目的で購入した物、又は食料の場合のように購入して貯蔵されている物に限られることになった。取引税役は文字通り取引税の徴収を担当する役であるが、参事会が決定する間接税 Akzise 一切を含むこの „Ungelt“ は、常に都市財政の最も有効な臨時的補助的収入源と見做された。そのため取引税は輸入ぶどう酒と国産ビールに始まって塩、鉄、輸入高級毛織物からすべての交易品に及んだ。その他に通門料 Torzoll, 道路関税 Wegzoll, ユダヤ人税 Judenabgabe, 移住手数料 Siedlungsgebühren, 水車手数料 Mühlenzins, 屋台賃 Standgeld 等も Ungelt に属した。最後に橋監督は昔は magister pontis と呼ばれ、市の石橋の維持とそのための基金の管理に当たったが、この基金は橋銭 Brückenzoll と洪水防止及び護岸のため船主と漁師から納められる税金から成った¹²⁾。

12) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 42–47.

3

本稿の冒頭に寄妙な記帳の記入者として挙げたマテーウスはヴィルヘルムの独り息子で、その生年は14世紀40年代の後半とアイケンベルク女史は推

定している¹⁾。ルンティンガー帳簿の記録は 1383 年 5 月 13 日から始まるが、これは新らしい企業の開始を意味するものではなく、親子で長い間営んできた業務の続行中に生じたものである。この年のレーゲンスブルク市の納税者名簿によるとルンティンガー家は市で第 4 位の多額納税者であり、またルンティンガー帳簿の冒頭の記載の第 2 項にはマテーウスが 2,800 グルデンの現金出資を父の会社にしたことが記されている²⁾。因みにアウクスブルクのハンス・フガー Hans Fugger の課税財産は 1389 年に 1,500 グルデンになったものと推定されている³⁾。マテーウスが上ドイツ大商家の多くの子弟と同じくヴェネツィア Venezia で商人教育を受けたかどうかは不明で、推測の域を脱しないが、立派な商人教育を修得していたことはルンティンガー帳簿がこれを証明している。

1) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 25–26, Fußnote 36.

2) „Item es hat mein sun Mathews der Runtinger pey mir in der gesellschaft 2800 guldein an weraitschaft ; gerait des pfiñcztag in der pfingstbochen.“ W. Eikenberg, *a. a. O.*, S. 19.

3) Götz Freiherr von Pölnitz, *Jakob Fugger, Quellen und Erläuterung*, 1951, S. 2 ; 拙稿「ヤーコプ・フガー(1)」産業経済研究, 第 4 号, 1956, 49 頁.

この商業帳簿から覗われる限り、親子の経営するこの会社の企業活動の推進力となったのはマテーウスであった。息子の積極的な経営方針に対し父親の慎重な態度は、ルンティンガー家の企業の展開を規定した基本契機であった。マテーウスの激しい性格については幾つかの逸話が伝えられている。娘婿の兄弟を市長宅で杖で殴り倒したために参事会員であったにも拘らず 2 週間の拘禁を命ぜられ⁴⁾、ヴェネツィアでは新興著しいニュルンベルク人に対してレーゲンスブルク商人の既得権を実力で守った⁵⁾。マテーウスの妻はミュンヘン München の富裕な都市貴族の娘で、女の子クララ Klara を残

して死んだので、彼はレーゲンスブルクの都市貴族で富裕なぶどう酒商人グラフェンロイター家 die Grafenreuther から2度目の妻マルガレーテ Margarete を迎えた。彼女との間には2人の娘が生まれ、息子ペーター Peter は早死にして仕事を引き継ぐ男の子には恵まれなかったが、この後妻は商才に富みルンティンガー家の企業のその後の発展に貢献するところ大であった。彼女は難かしい為替振替の仕事も引き受け、ルンティンガー簿帳には彼女の手による記載が多く見られる。

4) レーゲンスブルクの所謂 Gelbes Stadtbuch には次の記録がある。「ルンティンガーとその女婿 Hans Graner が市長宅で市長の面前で Jacob Graner に対して加えた暴行の故に、参事会はルンティンガーと婿を Prenprunne の貯水塔に4人の仲間と一緒に14日間送ることにした。」W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 26-27.

5) 15世紀にレーゲンスブルクで暮らした司祭 Andreas の chronicon generale には次のような報告がある。「皇帝 Karl IV. の治世に、レーゲンスブルク人が昔から占めていた Fondaco の首席の地位をニュルンベルク人が奪った。これを聞いたレーゲンスブルク人は大金をヴェネツィアに送って彼らの商人に、ニュルンベルク人が一年間に買う丈の商品を一度に買わせ、しかもニュルンベルク人は掛が多かったのに現金で買わせた。そこでヴェネツィア政府はレーゲンスブルク人に彼らの古い権利を認めた。後に国王 Wenzel の治世にニュルンベルク人はその地位を新たに要求したが、2人のレーゲンスブルク人 Matthäus Runtinger と Franz Pütreich は彼らの町の権利を実力で守った。事件は総督に持ち出された。総督は内心レーゲンスブルク人に好意を抱いていたが、ニュルンベルク人は多くの後押しを有していた。Franz Pütreich は Senat の前に彼の同市民の事件を持ち出して、あの強い影響を非常に激しく指摘して、レーゲンスブルク人に Fondaco の首席を永久に与えるという Senatsdekret を出させた。彼とその仲間 Runtinger はこの Dekret を自分で故郷に持ち帰った。」W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 70-71.

1389年死の床にあったヴィルヘルムは参事会員を招いて彼の有した官職

に関する会計報告を渡し、5月6日彼が死んだ後はマテーウスが独りで仕事を続けることになった。翌1390年には納税の記載が帳簿に見られ、マテーウスは325.5グルデンを納めたが、彼はこの年の自分の財産を計15,030グルデンと記しているの、当時の税率が3%であったことを考えると、彼は財産の三分の一近くを税務署に対して匿していたことになる。ルンティンガー家の商業帳簿は一般にローマ数字で記されているのに、財産状態に関する記入は本稿の冒頭に挙げた記載例の示す如くアラビア数字が使用されているうえ、本文までもこれを記号として利用していることは、その目的が那邊にあったかを察するに難くない。それでもこの税額及び財産を1396年のアウクスブルク市民のそれと比べると、同市の第2位に位置することになる⁶⁾。事実マテーウスはこの納税財産15,030グルデンの他に市の終身年金証書 *Leibgedingsbrief* 及び非課税の終身年金 *Ewigrente* で更に3,000グルデンを有したから、総財産18,030グルデンとなり、レーゲンスブルクで最も富裕な市民であった⁷⁾。

6) 1396年のアウクスブルク市の納税者の筆頭は *Dächsin* で税額360.5グルデン(財産21,630グルデン)、第2位は税額224グルデン(財産13,440グルデン)の *Mangmeister* で、ハンス・フガーは税額30.4グルデン(財産1,820グルデン)で41位にあった。Jakob Strieder, *Zur Genesis des modernen Kapitalismus*, 2. Aufl., 1953, S. 8.

7) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 20, Fußnote 6.

マテーウスはレーゲンスブルク市中最高の財産を有する商人として市に対して多くの債権を有したので、直接税及び間接税の納入は市金庫との間の相殺計算の形で行なわれ、一般に貸方が市に対する当座勘定に残っていた。彼も父と同様市のいろいろな役職にあったので、以下それについて略述しておかねばならない。彼は1394年にハンスグラーフの職にあったが、それは当時上述したように謂わば今日の商工会議所の会頭に当たる地位と見てよい⁸⁾。

また彼はこの年シュルトハイス裁判所と僧道院長裁判所とが合併された時、内部参事会より選出された陪席判事となったが、前述の如く市裁判所は商事裁判所に対し第2審を成したので⁹⁾、ハンスグラーフ在任中は市裁所の判決には加わらなかった。更に父ヴィルヘルムはレーゲンスブルク市が管理していたカタリーネン養老院 Katharinenspital の管理人 Pfleger であったが、マテウスも同じ仕事を引き受けたところをみると、これは彼らが市参事会員であった結果生じた役目と思われる。

8) 上述, 92 頁.

9) 上述, 94 頁.

だがルンティンガー一家の企業に深い関係を有した官職は 1392 年の造幣職 Münzamt 及び両替職 Wechselamt の引受けであった。レーゲンスブルクの貨幣鑄造権は他の高権と同様バイエルン公とレーゲンスブルク司教とが分有したが、彼らはこれを市の有力都市貴族数家に貸与した。この都市貴族たちは造幣家仲間 Münzerhausgenossen 又は簡単に Hausgenossen と自称して、貨幣鑄造を行なう封鎖的団体を形成し、共同の危険で造幣及び両替業務を営んだ。14 世紀中葉のこの Hausgenossen の鑄貨製造量は非常に大きく、例えば 1355 年以降の 2 年間には 900 万個近い銀プフェニヒ貨が刻印されたが、銀価格の長期的上昇と他の造幣局で鑄造された悪貨の流入によって、Hausgenossen の業務は徐々に苦境に陥った。そこで 1391 年に公と司教が新たな貨幣鑄造を行なおうとした時、Hausgenossen は参事会に対して義務を果たすことはできないと声明したが、差し当たり造幣業務を一時的に引き受ける者を仲間から出すことを承諾した。公と司教から貨幣鑄造の許可を受けた参事会は 1392 年にマテウス・ルンティンガー及び同じく参事会員のゲッツ・プロイマイスター Götz Preumeister を説いて造幣職に任命し、その後両人は市参事会の「懇請」, „fleißiges Bitten“ で 4 年の期任が過ぎた 1396 年にも

再任を引き受けた¹⁰⁾。それ迄に参事会を通して仲間から8ポンドずつで造幣職は買い取られており、その資金はマテーウスが前貸しした。新らしい造幣職の引受によってマテーウスに生じた権利義務の主なものは、自己の危険で貨幣を鑄造するに際しての完全な独立、造幣経営及びこれと結びついて他の市民に禁じられている銀取引並びに貨幣両替業務から生ずる全利益の取得、本来の貨幣鑄造権所有者としての諸侯に対する造幣税 Schlagschatz の引き渡しであった。ルンティンガー帳簿の刻印記録によるとマテーウスは1396-97年に3,700マルク、従って約900kgの銀プフェニヒ貨を鑄造し、その1プフェニヒ貨は0.5878gの銀純分を含む重量0.7834gの銀貨であった。しかし乍らマテーウスの努力にも拘らず、貨幣鑄造業務は軌道に乗らず、彼は1397年には刻印を止めたらしい。プロイマイスターの仕事も芳しくなかったようで、1419年にはカロリング時代まで遡ることの出来て何世紀もの間バイエルンで最も重要な造幣局であったレーゲンスブルクの貨幣鑄造は終焉した。マテーウスは刻印を止めても造幣職の地位は1407年の彼の死まで保持した。前述の如く両替業務は造幣の仕事と結びついており、悪貨の購入、外国通貨及び貴金属の両替は造幣及び両替職に在る者にのみ限られ、一部の例外を除いては他の市民には禁じられていたし、刻印材料入手のための銀取引も造幣職にのみ許されていた¹¹⁾。こうして当時上ドイツで流通していたすべての金銀貨が彼の両替台で清算され、両替銀行業務の記録はルンティンガー帳簿の半ば近くを占めている。

10) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 53.

11) 上述, 101頁.

だが今日その業績を目のあたり確認し得るマテーウスの活動は、彼の長年に亘る市建設局長 Stadtbaumeister としての尽力であった。13世紀初めに軍事高権を取得したレーゲンスブルク市民は、市の防衛のために市内を8つの

警備区域に分け、各区の警備主任 Wachtmeister は区内の市民と共に城壁及び濠の維持と消防の仕事を担当した。その統合的最高指揮者は独立官庁である市建設局長で、参事会から委託を受けて責任を負い、必要な金も参事会から受け取った。マテウスが局長時代に敷かれた舗石が未だ古い街路に残っているとのことだが、アイケンベルク女史の著書には Walter Boll, Zur Baugeschichte des Runtingerhauses in Regensburg という寄稿が図面と写真入りで巻末に収録されている。

マテウスの長女クララはレーゲンスブルクの富裕な都市貴族ハンス・グラナー Hans Graner に嫁ぎ後妻との間に出来たマルガレーテ Margarete とバルバラ Barbara も同じく同市の都市貴族の出の商人レッヒ家 die Lech の従兄弟同士であるエアハルト Erhard 及びヴェンツェル Wenzel と結婚した。この2人の娘婿は舅の企業に時々加わったが、男の後継ぎのなかったルンティンガー家の企業は 1407 年 7 月 19 日のマテウスの急死で、僅か 2 世代にして終止符を打つことになった。

4

1367 年市内のドナウ右岸に聳える都市貴族の居城を修道院長より買い取ったルンティンガー家は、この 4 階建の大きな建物の中にその企業の本拠を置いた。その中には事務所と倉庫の他に、家族と商業使用人及び召使の部屋もあった。同家の企業が発展するにつれて、隣接の建物が 1399 年に買い足され、上の階にはドナウ河の洪水に備えて高価な商品が保管され、屋根裏部屋は穀物倉に、地下室はぶどう酒倉に使われた。地下室からは階段が道路に通じ、この道路は数歩で旧ドナウ波止場に続いていた。1399 年にヴェネツィアから 2,000 枚以上の円盤ガラスを仕入れたことは、ルンティンガー邸がレーゲンスブルク市で最初の硝子窓を備えたことを推定させる¹⁾。企業の指揮はこの邸の中にある帳場 chammer で取られた。

1) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 64.

この帳場には「売買及び両替」„chaufmanschaft und wegsel“の元帳 Hauptbuch と数多くの会計簿 rechenpüchel が備えられ、箱の中には清算書、覚え書、発送記録 Sende-Regeste、手形、債務証書、定期金証書 Rentenbrief 及び現金が保管されていた。店主のヴィルヘルム及び後にはマテーウスは、市の外交使節として派遣された場合を除いては旅に出ず、この帳場から一切の業務を指揮した。商品の仕入や販売を委託された商業使用人や代理人 Kommissionar が現金や書類を持ってここから出発し、プラーハ Prag やウィーン Wien の支配人 Faktor が清算書を携えてここにやって来た。運送人 Fuhrleute がインドの香料、ヴェネツィアの絹、エジプトの綿花、ブラバントの毛織物をここの倉庫に運び込み、信頼し得るレーゲンスブルクの市民がベーメンの銀を携えてやって来た。これらの商品取引の他に貨幣取引と定期金取引 Rentenhandel、更に関税取得があり、最後にぶどう園、農地、ぶどう酒小売からの収入が受け取られた。以降これらの業務の主なものの内容を検討することによってルンティンガー家の企業の全貌を覗うことにしよう。

先ずヴェネツィア取引から見てみよう。レーゲンスブルクの商人は彼らとヴェネツィアとの交易は5世紀の昔に遡る上ドイツで最古の歴史を有するものだと自負し、1462年にもなおランツフート Landshut のルートヴィヒ富候 Herzog Ludwig der Reiche が通過税 Durchgangsmaut を要求した際、彼らレーゲンスブルク人は昔からヴェネツィア旅行では常に関税軽減を享受していたことを主張した。前述した如くドイツ人商館 Fondaco dei Tedeschi における共同食卓の首位の席を守るためにマテーウスが実力行使をも辞さなかったのも故なきことではない²⁾。故郷の町から馬で一週間以上も費してアルペン越えの困難な旅をしてドイツ人商館に辿り着いたレーゲンスブルク商人は、ヴェネツィア政府の厳しい監視の下に業務を遂行せねばならなかった。外来商人の商品売買の相手はヴェネツィア商人にのみ限られ、必ず政府の任

命した仲介人 Makler を通して行われねばならず、商取引の末端に至る迄の規制によってヴェネツィア政府は手数料と関税を確保するに努めた。ルンティンガー家のヴェネツィア取引は、ルンティンガー帳簿開始の 1383 年に大口で現われる。すなわちマテーウスはこの年の春と夏、金及び銀を携えて 2 度ヴェネツィアに旅行し、3,344 ドゥカーテンの仕入を行ない、更に商況視察のため春マテーウスに同行したハインリヒ・タッフエルスドルファー Heinrich Taffelsdorfer に 2,000 ドゥカーテンの仕入をこの秋に委託した。

2) 上述, 98 頁註 5.

当時上ドイツから送られてヴェネツィア市場で良好な販路を見出だした商品としては、大青、亜麻布、粗毛布、バルヘント Barchent 織物、バーゼル Basel の紙の他、北欧の毛皮製品と蜜蠟などが考えられるが、ルンティンガー家がヴェネツィアに送ったのは殆んど専ら貴金属であった。ヴェネツィア政府は外来商人のヴェネツィアでの商品購入について、直接の商品交換や外国通貨での仕入は認めず、すべてヴェネツィア通貨で支払わせた。従ってルンティンガー家の携えた貴金属もヴェネツィア金ドゥカーテンに両替されねばならなかったが、それは貴金属の種類によって次のような手続きが取られた。貴金属の第 1 はベーメン及びハンガリアの金貨であったが、純分の劣るベーメン金貨の場合は 2 - 3 % の打歩を計算せねばならなかった。上ドイツの銀貨は銀含有の純量で評価されるヴェネツィアでは不利なため、ルンティンガー家は一度も携行しなかった。金貨以外には金及び銀の延棒と塊、また金銀細工、そして最後に流通禁止となった鑄貨、すなわち所謂 gewogene Groschen oder Pfennige が利用されたが、この最後のものは当然その金属価値の重量で評価された。ルンティンガー家のヴェネツィアに送った銀の大部分はベーメンのもので、同家はこれをプラーハ支店を通じて調達し、„gewogenes oder gebrochenes Geld“ と呼ばれた流通禁止となった銀貨がルンティンガー家の

ヴェネツィア向け貴金属の中心を成した。これらの貴金属はヴェネツィアにおいて正規の販売商品と見做されたが、それらは競売 *Versteigerung* にかける前に法の定める *Mindestlegierung* に出されねばならなかった。これは純分を調べるために、特別に備え付けた石でこすった後、鉛を添加して熔解された。こうして得られた *Braudsilber* 又は *Dürrsilber*、乃至は *Brandgold* が販売されたが³⁾、鑄貨と装身具の一部は純分試験の後熔解されずに売られた。また熔解の際残った *Test* と呼ばれた合金にも買手があった。金貨及び銀の延棒の場合には大抵 *Kanten* と呼ばれる検査で済まされた。これらの *gebrannte Edelmetall* 又は *gekantete Edelmetall* は最終的に販売される前に、なお検量所と税関を通過せねばならなかった⁴⁾。

- 3) 「熔解された銀はそこで *Brabd* oder *Dürrsilber* と呼ばれた；*Dürrsilber* は恐らく *Brandsilber* よりも純分が劣り、両者は *Barrensilber* ほど純度が高くなかった」*W. Eikenberg, Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg, 1976, S. 135.*

- 4) *W. Engelberg, a. a. O., S. 73–79.*

こうしてヴェネツィア通貨を入手したルンティンガー家の商業使用人または代理人は、次ぎに仕入に取りかかったが、上述の1383年の仕入の場合には本社から出発の際に詳しい購入商品のリストを受け取り、仕入価格も予め大体計算されていた。これに反し仕入係 *Einkäufer* に如何なる商品を仕入れるかが委託される場合が非常に屢々見られ、こういう場合にこそ仕入係の商才が充分に発揮されねばならなかった。ルンティンガー家がヴェネツィアで購入した商品の主なものは胡椒、サフラン、„kleine“ *Gewürzen* (胡椒及びサフラン以外のすべての香料)、綿花、生糸及び絹織物、オンス金 *Unzengold* (織物加工用の金) であった。仕入係はこれらの商品の仕入原価と諸経費を計算して、帰国のうえ主人と清算したが、この経費の中の諸項目はヴェネツィアにおける商品仕入及び発送の実態を詳細に報告するものである。⁵⁾ ヴェネ

ツィアで入手したヴェネツィア通貨の全部が商品仕入に充てられなかった時は、残余の金はヴェネツィアに在る銀行業者に預託された。この預金はその後の仕入の際に引き出すこともできたし、その預金証書は故郷においてヴェネツィア仕入を企図する他の商人に売却することもできた。

5)ヴェネツィア仕入の際、常に一定額で現われる *underchauffel* は政府の任命した仲介人を指し、屢々「酒手」„*Trinkgeld*“とも呼ばれて彼らに支払われた手数料を指すが、これは買手が負担したもので、仕入の際にのみ計上されるが、販売の際には記されていない。検量費には検量所迄の輸送費が必ず伴ったが、それは当局の任命した運送人によって行われたためで、商品の価値及び重量に応じて支払われた。胡椒及びサフランの取引の場合には国が任命した „*Gerbelator*“ が品質検査に当たり、その検査料は売手と買手が折半した。梱包も密輸出を取締るために当局の指定した荷造人や封印人の手で行なわれ、正規の梱包手数料の他に更に酒手が必要であった。W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 83–84.

ルンティンガー家がヴェネツィアで仕入れた商品のうち約 $\frac{1}{3}$ が絹及び絹織物、同じく $\frac{1}{3}$ が綿花で、残りを胡椒、サフラン等が占めた。レーゲンスブルクは中世フランスの古い詩の中で絹織物が „*Regensburger*“ と呼ばれていたことから覗われるように、絹のフランス向け輸出では古い歴史を有したが、ルンティンガー家が活躍した頃は、シャンパーニュ Champagne 大市の後退と西南ドイツ諸都市の抬頭によって、販路を東方に転じていて、同家の絹取引は平均純益 20–30%を挙げた。綿花については 14 世紀後半レーゲンスブルクで盛んになったバルヘント織物業のために、ルンティンガー家はヴェネツィアからの原綿の輸入とバルヘントの東北向け販売に活躍し、1383 年には 2 回のヴェネツィア仕入で 5 トン近くの綿花を買い付けた。この綿花をルンティンガー家は市内のバルヘント織工 *barchenter* に、1 ツェントナー *Zentner* の原綿に対し $10\frac{3}{4}$ 反のバルヘント織物を引き渡す条件で渡した。バルヘント織工は 1 ツェントナーの綿花から大体 $21\frac{1}{2}$ 反 (1 反重量約 2.5 kg) のバ

ルヘント織物を作成したから、残りの反物が自分のものとなった。ルンティンガー家のこの綿業務の純益をバスティアンは 1383-84 年について少なくとも 48%であったと計算しているが、それは異常な例であって、むしろその後は原綿の供給杜絶のため 80 年代末にはレーゲンスブルク市のバルヘント織工の転出が続き、90 年代になって情勢が安定した時にはシュヴァーベン諸都市の競争に會って、レーゲンスブルク市はかつてのバルヘント織物業の中心地としての地位を二度と回復することはできなかった⁶⁾。

6) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*. 1976, S. 88, 104-105, 124-127.

1395 年綿花とバルヘントの取引が全面的に停止するに至った際マテウスは毛織物取引への進出を決意し、毛織物生産の中心地ブラバント侯国からの毛織物輸入を試みた。マテウスの指令を受けた同家の商業使用人ヘンスライン・エルンスト Häslein Ernst とブラバントの運送業者リープライン・リングハイム Lieblein Ringheim によって、10 週間以上を費してブリュッセル Brüssel とレーヴェン Löwen で仕入れたいろいろな毛織物のリストが提出された。その中には上記 2 都市の他にブラバントではメヘルン Mecheln, 更にリュッティヒ Lüttich 司教区のマーストリヒト Maastricht 及びザンクト・トロント St. Trond の製品も見られた。これらの織物の梱包は購入した町の指定荷造人によって行なわれた。この仕入は見返り商品の販売なしに現金で行なわれたが、その理由は商品の陸上輸送の困難と危険の他に、ヴェネツィア商品をフランデルンとブラバントでは販売しないというヴェネツィアとの協定があったためだ。15 世紀に入るとフランクフルト Frankfurt am Main が上ドイツ向けネーデルラント毛織物の主要積換地となり、上ドイツ商人はわざわざ産地に赴く必要はなく、ルンティンガー家の場合 10 週間もかかるブラバント旅行の代り 4 週間で済むフランクフルト仕入で毛織物が入

手できた。しかも 1403 年春ルンティンガー家の仕入係がネーデルラントに旅した時ブラバント及びリュッティヒ産の毛織物は直接産地で購入した価格よりも、この年のフランクフルト秋市で仕入れた方が安かった⁷⁾。最初の 1395 年の仕入品は大部分をレーゲンスブルク市内の小売商に渡し、約 2 割の純益を挙げた。1401 年にルンティンガー家は市内に反物小売店を開き、商業使用人でパートナーでもあったエアハルト・レッテル Erhard Lettel にこの店を任せ、この店は以後年 2 割以上の純益を保った。

7) 「そこで 1403 年の春ルンティンガー家の仕入係が——恐らく情報を集めるためとフランクフルトの仕入の安いことを調べるために——もう一度ネーデルラントに旅行した時、4 反の濃青色のマーストリヒト毛織物に対して、マーストリヒトで 15 ½, 17 ½ 及び二度 18 グルデンを支払ったが、この年の秋フランクフルトの秋市では同じく 4 反の濃青色のマーストリヒト毛織物は各反 14 グルデンしただけだった。」 W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 98.

ルンティンガー家がブラバントと上ドイツの大市から仕入れた毛織物は以後大部がウィーン支店を経て東方に送られることになるが、ヴェネツィアから仕入れた商品についてもレーゲンスブルク市内で販売されたのは比較的小部分で、大部分はベーメン、ポーランド、ロシア向けの商品としてプラーハ支店に送られた。プラーハの支配人ウルリヒ・フルター Ulrich Furtter は 1383 年に支店業務の清算をするためにレーゲンスブルク本店にやって来て 5 月にその仕事を終えると 6 月に帰任した。翌 84 年 7 月に前年の 5 月以降のプラーハの業務の貸借対照表が作成されたが、3 割の純益で約 2,000 金ドゥカーテンの利益が 1 年間に生じた。80 年代の後半はバルヘントがプラーハでの販売の大部分を成したが、前述したように 80 年代末以来レーゲンスブルクのバルヘント生産が急激に後退したので⁸⁾、プラーハ支店の取扱い量も著しい減少を示し、90 年代と世紀の変わり目には主に香料が送られた。この頃ネーデルラントで大量に購入された毛織物がプラーハ支店で販売されなかったの

は、ベーメン、シュレーズィエン、ポーランドの商人がネーデルラントやフランクフルト大市に自分で仕入にやって来たこと及びその地方に自国の毛織物工業が勃興したためであろう。これに反しヴィーン支店は専ら毛織物の販売を目的として1401年に設けられ、ハンス及びエァハルト・レッテル兄弟に委ねられた。プラーハ支店では東方の商品を仕入れることなく、売上はすべてベーメン及びハンガリアのグルデン金貨、グロッシェン銀貨及びドゥカーテン金貨の現金で本店に送られた。この現送はルンティンガー家の者の他、ベーメンを訪れた信頼し得るレーゲンスブルク市民にも託された。プラーハ支店における仕入は、ルンティンガー家の銀取引の中心を成す屑銀 Bruchsilber が最も重要なもので、これは「秤りグロッシェン」 „gewogenen Groschen“ と呼ばれた、流通禁止によって貨幣価値を失い、その銀価値に応じて取引された銀貨で、ベーメンのグロッシェン銀貨は上ドイツの大抵の銀貨より銀含有の比率が高かった。このベーメンの秤りグロッシェンは同家のヴェネツィア仕入の資金となったのみでなく⁹⁾、造幣業務にとっても重要な原料として粗銀と並んで購入されたが、銀の相場の激しい動きに対応するために、有利な銀仕入を行うための金ドゥカーテンが本店からプラーハへ送られることもあった。ヴィーン支店でも商品仕入は殆んど行なわれず、毛織物の売上代金のヴィーンナー・プフェニヒ Wiener Pfennig 銀貨その他はプラーハ支店と同じ方法で本店に現送された。

8) 上述, 107 頁.

9) 上述, 104-5 頁.

5

ルンティンガー帳簿の記載の及ぶ24年のうち、1389年のヴィルヘルムの死まではルンティンガー父子は共同で業務を営み、以後はマテーウスが事業の単独所有者であったが、商業使用人であるレッテル兄弟と当座組合 Gele-

genheitsgesellschaften を結成している。ルンティンガー家の企業は企業形態史上どのような地位を占めるものであろうか。先ずルンティンガー親子は一つ屋根の下に暮らしていたから家族共同体 Familiengemeinschaft であったかどうかを見てみよう。家族共同体では息子たちは自分の家族の生活費を家長に見て貰って家業に協力し、父の遺産の相続期待者として働いているが、マテーウスは父の企業に大きな現金出資をして、その出資分について清算を受けており、彼の出資金は帳簿開始の 1383 年に 2,800 グルデンに達していたことはすでに見た如くで¹⁾、この金額はルンティンガー家の業務の総資本の約 $\frac{1}{4}$ に当たる。それではルンティンガー親子の企業は合名会社 Offene Gesellschaft であったかと云うに、マテーウスはその資本と労力の提供にも拘らず、合名会社の社員としての共同所有者 Mitinhaber の資格を有していなかった。父ヴィルヘルムは企業の「主人」 „Herr“ として「自分の金」 „meines Geld“ 「自分の商品」 „meine Waren“ を動かしているものとして記録した²⁾。マテーウスは私的に使った金について詳しい計算を出さねばならなかったが、父には会計報告義務はなかった。合名会社であればヴィルヘルムにも管理している社員 verwaltende Gesellschafter として、マテーウス同様に会計報告義務がある筈である。

1) 上述, 97 頁。

2) 但し 1383 年 5 月の帳簿開始の記録の中には共同所有を思わせる個所が 2 つある。

W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 152.

それではルンティンガー父子の共同企業は如何なるものと見るべきであるか。アイケンベルク女史は双方が資本を出すコンメンダ Commenda, 即ち北欧ハンザ地域の wedderlegginge, 地中海地域ではヴェネツィアの手本に倣って collegantia と呼ばれるコンメンダの形態であるとする。即ちそこで典型的であったのは「家に留まる Sozius, socius stans 又は commendator が計画し

た企業に貨幣や商品の出資をしたのみでなく、旅に出る Sozius, tractator も自分の——確かに大抵はより少ない——出資で企業に加わった」ことだ³⁾。この企業形態では「tractator は彼の出資にも拘らず一般に独立的でなく, Socius stans は企業の唯一の営業主で, 彼は Tractator に拘束的指令を与え, その詳しい会計報告を受け取った⁴⁾。」これはヴェーバーがソキエタス・マリス *societas maris* として説明している企業形態である⁵⁾。すなわち父ヴィルヘルムは企業全体を指揮する主人で, 家に留まる socius stans であり, マテウスは旅に出る, 出資に加わった tractator であり, 詳細な会計報告を父に提出した。但し大塚久雄教授の説く如く「トラクタートル自身の出資なる事実に対応して, 彼の当該企業におけるイニシアティヴあるいは支配力が増大し, コンメンダートルとトラクタートルの関係において後者がむしろ『業主』(カピタネウス)の地位にたつことが一般的になるに至った」ことがソキエタス・マリスの発展傾向であったから⁶⁾, ルンティンガー親子の共同企業はソキエタス・マリスの初期的形態と称すべきであろう。

3) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 153.

4) W. Eikenberg, *a. a. O.*, S. 154.

5) Max Weber, *Zur Geschichte der Handelsgesellschaften im Mittelalter. Nach südeuropäischen Quellen*, 1889, S. 22–31.

6) 大塚久雄, 「株式会社発生史論」大塚久雄著作集, 第1巻, 1969, 110頁。

帳簿に現われるマテウスの1383年5月の2,800グルデンの最初の出資は1384年11月までに278グルデンの増大を示したが, この間に94グルデンの引き出しがあったので, 彼の貸方勘定は2,984グルデンとなった。ルンティンガー父子は1384年にドナウの塩及び鉄関税の徴収権を, バイエルン公に対する貸付の抵当として取得したが, その貸付資金はヴィルヘルムが4,000グルデンを出し, マテウスは2,000グルデンを上記の貸方勘定から振り替え

た。この関税収入は純益の $\frac{2}{3}$ がヴィルヘルムの貸方に、 $\frac{1}{3}$ がマテーウスの貸方に毎年記入され、明らかに共同企業として他の商品取引とは別個に扱われた。更に商品取引の内部でも、ヴェネツィア商品取引とベーメン貴金属取引とは、別々の決算が行われて、他の取引と区別されているが、決算は平均半年乃至1年半置きに行われた。次にマテーウスと商業使用人レッテル兄弟との共同企業はどのようなものであったか。1395年マテーウスが毛織物取引に乗り出した時、この新らしい業務部門は仕入も販売もすべてエアハルト・レッテルに任された。こうして1400年以降レッテルはブラバントとフランクフルト大市での仕入、ウィーン市場での販売、更にレーゲンスブルク市内での反物小売を引き受けたが、彼はルンティンガー一家の商業使用人として固定年俸を受けると共に主人と当座組合を締結した。この共同企業には、マテーウスが家に在る *socius stans* として資本全部を出し、エアハルトは無資本の *tractator* として働く狭義のコンメンダと、レッテルも出資するトラクタートルであったソキエタス・マリスとの2種類があった⁷⁾。エアハルトの兄弟で1402年以来ルンティンガー家に商業使用人として仕えたハンス・レッテルも主人とウィーンにおける毛織物販売業務に関し共同企業を営んだ。ハンスの場合はエアハルトのように仕入に関係しなかったので、毛織物販売に関する諸経費の清算という形を取ったが、ハンスは自分の毛織物も扱ったので、販売旅行の個々の区別が重要であった⁸⁾。

7) ソキエタス・マリスの例としては、「レッテルは1402年フランクフルト Fastenmesse で彼が行なった毛織物購入に270グルデンの自分の出資を行ない、これにはマテーウス自身が315グルデンを出した……損益計算は組合員のそれぞれの出資に比例して、即ち „nach Anzahl“ で計算された。」W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 161. 狭義のコンメンダの例としては、「レッテルは——自己の資本なしに——レーゲンスブルクにおける反物小売のすべての毛織物企業に平等なパートナーとして加わったが、ウィーンの毛織物販売の売上には加わらなかった。ウィーン支店が引渡しを受けることになった毛織物仕入——

それは主にブラバントの毛織物であった——をレッテルは任命された商業使用人として指令通りに遂行したに過ぎない。一つの大口仕入からヴィーン業務が賄われると共に、その一部はレーゲンスブルクで Ellen で小売されたから、これらのそれぞれの商品勘定は利益配分のために厳しく区別されて、その中にはヴィーン向けとされたものもあった毛織物を列挙した最後には、こう記された。„Was an dem Gewand, das hier (Regensburg) bleibt, gewonnen wird, das ist halbenteil des Lettel Erhard.“ これに反し、仕入が初めからレーゲンスブルクでの反物小売に決められたものだけであつたら……指図又は仕入計算は次の一般的な註を持つ „der Gewinn ist halb des Lettel“ 又は „die halbe Wagnis ist sein.“ 従つてこれは、レッテルが無資本の組合員として遂行した旅行の際、損益が両組合員に均等に分けられたことを意味する。」W. Eikenberg, *a. a. O.*, S. 162. 通常コンメンダにおいては無資本のトラクタートルの利潤分配は $\frac{1}{4}$ であつたから、レッテルの $\frac{1}{2}$ という高い比率をアイケンベルクは、彼が販売だけでなく仕入も引き受けたからだと説明する。W. Eikenberg, *a. a. O.*, S. 162—163.

- 8) ルンティンガー帳簿における次の記載が例示とされる。„Item so hat Hans Lettel 21 Tuch von Köln mit meinem Gewand nach Wien geführt, davon kostet je eines 12 Gulden im Einkauf, Die 21 Tuche sind verkauft wie es auf dem Blatt geschrieben steht. Aber mein Gewand und sein Gewand soll durcheinander verkauft werden und abgerechnet.“ W. Eikenberg, *a. a. O.*, S. 165—166.

6

最後に会計史上におけるルンティンガー帳簿の地位について一言しておくなくてはならない。先ず両替勘定の整理を見るに、諸種の通貨の収支を借方と貸方とに対立させることに努め、これは 1390 年代の後半には完全に行なわれた。両替勘定の借方には、両替を行なうために帳簿の金庫から受け取った現金が記され、貸方には両替された貴金属及び鑄貨、更に業務及び家計の支出が記された。6—10 週間毎に決算が行われて、両替利益は „Überlauf“ としてこれはアラビア数字で記入された。得意先勘定については通常、掛売が次々と記され、支払が行われると十文字に抹殺された。但し常得意に対しては予め余白が取って置かれて、この顧客に対する時を異にする取引が同じ頁又は

続く頁に記入されるように配慮された。更に進んで 1395 年の記載では、永続的取引の期待されたブラバント毛織物の大口の買手であるグライモルト Greimolt について、初めから彼に対して何頁も余白が取られ、最初の 2 頁には彼に対する引渡しの商品名称、日付、売渡価格及び支払期限を詳しく記され、その後に以後の引渡しのため空白の一頁が取っており、続く 2 頁には彼の支払が日付と共に記されて、借方と貸方の分離の方法が取られている。同じような記帳はアムベルク Amberg の造幣親方ケーグラー Kegler に対する銀引渡しについては見られないが、それはこの引渡しが 1386—90 年のことで、ヴィルヘルムの時代には未だ借方と貸方の分離が明確に行なわれず、マテウスの時代に実行されたことを証明している。レーゲンスブルク市に対しては当座勘定が設けられて、マテウスの税金が市に対する彼の債権と相殺されたことはすでに述べた¹⁾。

1) 上述, 99 頁.

四分の一世紀に亘るルンティンガー帳簿の記入は、企業が展開し記載者が交替したことによって一貫性を欠くものとなっている。表題にしてから最初の *rechenpuch* は後に *chaufmanschaft und wegselpuch* と変わり、最初のうちは商業使用人に対する貸銀勘定が記入されていたが、後年には特別な会計簿がそのために使われた。プラーハにおけるヴェネツィア商品取引が決定的な役割を演じた最初の頃には、プラーハ支店の特別な売上簿の指摘が頻繁であったが、1400 年頃のヴェネツィア商品取引の縮少が帳簿の記載に反映したことも当然であった。更に最初のうちは非常に頻繁な家族内の私的な記載は、90 年代末頃全く消え失せた。全体的に見て 1396 年以降は帳簿の主目的は常に両替勘定の記録に置かれ、これは帳簿内容の殆んど半分を占めて、詳細に記入された。

ところで周知の如くゾンバルトは中世の帳簿の粗雑であったことを次のよ

うに強調した。「これらすべての、正確に計算する意欲と能力の欠如は、だが中世の簿記に最も明瞭に現われている。Tölner, Viko von Geldern, Wittenborg, Ott Ruland と云った人物の記録に目を通す者は誰でも、記録者が当時の大商人であったと考えるには苦勞する。何故なら彼らの記帳全体は、今日小さな田舎町の小売人が誰でもやっているような、売買の金額の乱雑な記入以上には出ていない。それは実際には „Journale“, „Memoriale“, すなわち町の市場に赴く農民の手拭いの結び目の勘定に代わる控え帳に過ぎない。そのうえ間違いだらけだ……個々の記載がこのように混乱しては正しい道を見つけることはできないし、見つかる筈もない。」²⁾ゾンバルトのこの見解より「一部は一層進んだ結論に達した」コルツェンドルファー A. Korzendorfer のルンティンガー帳簿の評価に対してバスティアンは詳細な批判を加えている³⁾。いずれにせよドイツでアラビア数字を使った最初の商業帳簿であるルンティンガー家の帳簿は、「正しい道を見つける」ことが充分可能であったことは間違いない。

2) Werner Sombart, *Der moderne Kapitalismus, Historisch-systematische Darstellung des gesamteuropäischen Wirtschaftslebens von seinen Anfängen bis zur Gegenwart*, 3. unveränderte Aufl., 1919, I. Band, S. 298–299.

3) Franz Bastian, Das wahre Gesicht des „vorkapitalistischen“ Kaufmanns, *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 24. Bd., 1931, S. 1–14.

リッカー M. Ricker はペンドルフに倣ってドイツにおける簿記の発展を 3 段階に分け、14 世紀初頭から 15 世紀末までを第 1 段階とし、経験的に作られた記帳をその特色とするペンドルフの「単式簿記」„einfache Buchhaltung“ の時代であるとする⁴⁾。この単式簿記の時代の発展過程は「掛売だけを記した Holzschuher 家の簿記から、ルンティンガー家の特殊な簿記技術を経て、南ドイツで最初の商人として 1426 年に借方と貸方を対照して複式の基礎を創始

したニュルンベルクの Ulrich Starck の完成した形の記帳に至る」と要約される⁵⁾。更に彼はルンティンガー帳簿には「複式簿記の殆んど完全な代替」が見られるとし、ルンティンガー父子は「1400 年頃単式簿記をすでに完成していて、当座勘定、人名勘定及び一種の物的勘定を知っている」とする⁶⁾。しかし彼はここの叙述においてヴィルヘルムとマテウスを取り違えているところからも覗われるように⁷⁾、ルンティンガー帳簿の内部における発展に注目していない。ルンティンガー帳簿の簿記発達史上の位置づけは、会計史研究者に委ねることにして、ここでは只この商業帳簿が始めと終りでは可成り性格を異にするものであったことだけを指摘しておく⁸⁾。

4) Manfred Ricker, Beiträge zur älteren Geschichte der Buchhaltung in Deutschland, *Betriebswirtschaftliche Aufschlüsse aus der Fuggerzeit*, 1967, S. 115.

5) M. Ricker, *a. a. O.*, S. 136–137.

6) *Ebenda*, S. 137.

7) *Ebenda*, S. 137.

8) ドイツ簿記史研究の近況については, Hermann Kellenbenz, *Buchhaltung der Fuggerzeit*, *Vierteljahrschrift für Sozial- und Wirtschaftsgeschichte*, 58. Bd., 1971, S. 221–229.

アイケンベルクはルンティンガー家の企業活動に関する彼女の叙述の目的は「一つの „weltweit denkender“ で „fortschittlicher“ な卸売商業類型が同じ頃、すなわち 14 世紀に、レーゲンスブルクにも存在していて、そこから活躍していたことをルンティンガー帳簿で示すことによって、Stromer v. Reichenbach により先ずニュルンベルクについて得られた認識を支援し、拡大するのに寄与しよう」とするに在ると述べる⁹⁾。シュトロマーは数多い労作で、すでにハンザの全盛時代にニュルンベルクには重要な卸売商業企業が存在して活発な活動を行なったことを示した¹⁰⁾。アイケンベルクはドイツ中世の商業の意義を軽視した学者としてゾンバルト, von Below, K. Bücher を挙げ、

Paul Rehme でさえその見解に組みしていたとし、これに反対する陣営に属する者として、Bechtel, Dopsch, Kötschke, Lütge 及び Th. Mayer を挙げる¹¹⁾。しかし中世商業の評価は改めて取り上げるべき大きなテーマである。ルンティンガー家の企業の解明は、中世商業の有する世界経済的関連を明らかにすると共に、レーゲンスブルクが中世後期に占めた社会経済的地位を示すのに大いに貢献するものと云はなくてはならない。

9) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 61—62.

10) Wolfgang Frhr. Stromer von Reichenbach, *Die Nürnberger Handelsgesellschaft Gruber-Podmer-Stromer im 15. Jahrhundert*, 1963 ; Ders., *Das Schriftwesen der Nürnberger Wirtschaft vom 14—16. Jahrhundert*, 1967 ; Ders., *Oberdeutsche Hochfinanz 1350—1450*, 1970.

11) W. Eikenberg, *Das Handelshaus der Runtinger zu Regensburg*, 1976, S. 59—59, Fußnote 7.